運命の姫

水城りおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
運命の姫

【Ｎコード】
Ｎ４０９６Ｍ

【作者名】
水城りおん

【あらすじ】
ごく普通の学生だった片瀬菜月。
当たり前だった日常が突如として終わりを迎えた時、菜月は見知らぬ青年に助けられる。
幼児にまで戻り名前を変えて異世界で生活する事となった菜月。
彼女の歪められた運命はどうなってしまうのか。
話の傾向はシリアスとコメディが混在＋恋愛。

０１：終わりのとき（前書き）

連載中の「勇者の弟」のヒロイン・レティの物語です。
開始時は勇者の、より十数年前となります。

話が進めばルッツ達も出てくる予定です。
勇者の、の合間に書いているので更新は遅めですがどうぞよろしくお願いします。

01：終わりのとき

片瀬菜月、十六歳。
特に幸だとか不幸だとかいうわけでもなく、特殊な能力があるとかいうわけでもない。
少しだけ人より好奇心が強くて活発なぐらいのごく普通の学生。
そんな普通の学生の自分にも非日常は突然にやってきた。

それは菜月が登校の為バスに乗った時のことだった。
学校へと向かうバスは海岸沿いの道を走っていた。バスの乗客数は椅子に座りきれずにちらほらと立っている人がいる程度。菜月も立っている乗客の一人だった。
菜月はいつも乗るときの習慣となっているバスの後部出口付近に立ち外を眺める。
窓の外を流れるのはいつもどおりの何気ない風景。
菜月がぼんやりと外を眺めていると、きらりと空で何かが光ったような気がした。

「ん・・・？」

見間違いかと目を擦る。目を凝らして見ればぼんやりと浮かぶ影。
慌てて周りの人を見渡しても、同じように外を眺めている人に何の反応も見られない。
見間違いだろうかと再び外を見てみれば、影は先ほどよりはっきりと形を取りつつあった。

（やっぱり見間違いなんかじゃない。他の人には見えていないだけ？）

菜月が考えている間にも影はさらにはっきりとした形になっていく。
その姿は人のように立つトカゲのようなシルエット。逆光のように真っ黒な影。

（何あれ気持ち悪っ・・・！）

黒い影なのでそこまではっきりと見えるわけではなかったが、胃からこみ上げてくるものがあった。
がくり、と膝の力が抜ける。
菜月は反射的に手すりを握る手に力を込めてなんとか倒れる事だけは免れる。
そしてうまく力の入らない体を支えながら顔を上げ再び空を見上げた。

黒い影の中にはっきりと真っ赤な口が開いているのが見える。
その瞬間、すさまじい音とともにバスが激しく揺れ車内に悲鳴が響く。
車体が左後方に大きく傾き、その拍子に菜月の手が手すりから離れ、ふわりと彼女の体が浮き上がった。

「え、ええっ？」

そしてそのまま何故か開いていた後方のドアから菜月は外に投げ出されてしまった。

バスの中ではさらに激しく悲鳴が上がったが、菜月にその音は届かなかった。
運の悪い事にバスは海岸側の斜線を走行中、ちょうどバスの後方部分の道路が崩れバランスを崩したのだ。
さらに運の悪い事にその衝撃でバス後方のドアが開いてしまい、菜

月だけが車外に放り出されたのだった。

車外に放り出された菜月は放物線を描きながら海へ向かって落下していた。
きっとこの後自分はただでは済まないだろうと容易に想像がつく。
岸壁に叩きつけられるかもしれないし、運良く海の中に落下したとしてもその後どうなるかわからない。
万が一自分に何かあった場合、残された家族がどれほど悲しむか。
それを考えると菜月は胸が痛かった。

空に浮かぶ不気味な影は赤い口をにんまりと笑みの形に歪め、そして姿を消した。
しかしその影に菜月以外の人間が気付く事は無かった。

落下している間の時間が菜月にはやけに長く感じられた。
何故か自分だけがこんな目に会っているのはあのトカゲのような影のせいなんだろうとも思う。
そしてこれから起こるであろうことを考え菜月はきつく目を閉じた。

02：白い世界

いつまでもたっても衝撃が菜月の体を襲う事は無かった。
恐る恐る菜月が目を開くとそこには白い、どこまでも白い世界が広がっていた。
見渡しても見えるのはどこまでも続く白ばかり。地面と空の境界すらわからないただ真っ白な世界。

「ここどこ？まさか天国・・・」
「貴方がいた世界ではありませんが、天国というわけでもないですよシックザール・プリンツェスィン」

突然聞こえた声に菜月が驚いて振り返ると、そこに立っていたのは綺麗なシルバーブロンドに透き通るような青い瞳の青年。美青年といって過言ではないだろう顔立ちだ。

「しっくざーる・・・？」
「悪意によって歪められたしまった運命・・・違う運命の元でも君は生きたいと願う？」
「よくわからないけど・・・生きられるのならば生きていたい」

青年から突然投げかけられた言葉に菜月は反射的に答えていた。
死ぬのは怖い。
日常が突然終わる事よりも自分という存在がなくなるということが。
そして何より大切な人たちを悲しませてしまう事が辛い。

「それじゃあ君は君のままで生きて。世界が変わってもきっと君なら大丈夫」

「え・・・？」
「本来ならば・・・成長したあの子が君と出会い助けるはずだったのだけど・・・運命は歪められ、ボクが君をこの世界に連れてきてしまった」
「あの子？運命？何のこと・・・？」
「運命とは外れた存在となってしまった君は世界から異端とみなされてしまうから・・・少しでもなじめるように、あの悪意に見つかりにくいように。君の時間を少しだけ戻させてもらうね」
話の内容がほとんど理解出来ていない菜月を見つめ、青年は寂しそうに微笑む。
「あなたがあたしを助けてくれたのね・・・？ありがとう」
菜月の言葉に青年が驚き顔を上げる。
青年の話を聞いて、菜月がただ一つ理解できた事。
理由はわからないがあのままでは自分は殺されてしまうところだったのだろう。それをこの青年が助けてくれたから今ここに自分がいるのだと。
「・・・あの子を助けてあげて」
「あの子って誰・・・？」
「さぁ、もう行って。・・・君に祝福を」
「え、あのっ・・・」
青年の言葉が終わらぬうちに菜月の視界がさあっと白く染まる。
（まだ聞きたいことがあったのに。名前すら聞いていないのに・・・）

「・・・・・」

菜月は薄れ行く意識と視界の中で青年が何かを呟き、先程彼が見た寂しそうな笑顔ではなく、嬉しそうに笑むのを見た気がして少しだけ胸に暖かいものを感じた。
そして視界が完全に白で包まれて少し先も見えなくった時、菜月は意識を完全に手放した。

一方白い世界の白い青年は、菜月の去った後も白い世界に佇んでいた。

「今は霧に包まれたように運命が見えないけれど・・・このままではあの悪意の望むように世界に崩壊が訪れてしまう。今のボクは直接世界に関わる事ができないから・・・」

青年は白い空を仰ぎ言葉を続ける。

「君なら崩壊を止めることができるかもしれない。あの子のシックザール・プリンツェスィン。運命の姫・・・」

次の瞬間、青年の姿はその場から消えていた。
青年の消えた後の白い世界にはただ静寂のみが広がっていた。

０３：目覚め

青年からの過剰ともいえる期待を受けていることなど知る由も無い菜月はベッドの中で目を覚ました。

高い天井、見慣れない造りの広い部屋はどこかのお屋敷の一室といった様子で菜月の慣れ親しんだ自宅ではない。
落ち着かなくベットの上で体を起こしてみると、気だるさはあれどどこかおかしいといったところもないようだった。
あの不思議な青年の姿もなく、部屋の中に菜月以外の人の姿も無い。
ふと菜月の脳裏に青年の言葉がよぎる。

「世界が変わってもきっと君なら大丈夫」

あの青年は確かにそう言った。
世界が変わるというのはどこか外国に来てしまったということなのかと菜月は思案する。
菜月は勉強は得意なほうではなかったので英語などの外国語を話す事などできない。
ジェスチャーとかである程度は伝わるだろうと持ち前の前向き根性を発揮させて深く考えるのをやめた。
悩んでもいても仕方が無いのだ。菜月にとってはこれからどうするかの方が重要だった。

菜月は誰か人を探そうとベッドから降り部屋のドアへと向かう。
思ったより長く眠っていたのか、体が思うように動かずによたよたとした歩きになってしまった。
のたのたと歩いていた菜月がドアに到達する直前、彼女の目の前で部屋のドアが開かれた。

菜月が驚いて見つめる先にいたのは二十代後半ほどだろうと思われる男性。

「おや、目が覚めたんだね」
「あ・・・はい」
「どこかおかしいところはないかい？」
「はい、特には・・・」
「そうか、それはよかった」

矢継ぎ早に質問され、菜月がそれに答えると男性は安堵の表情を浮かべた。
一方菜月は目覚めてから初めて発した言葉で違和感に気づく。
うまくろれつが回らずたどたどしい。
改めてあたりを見渡せば菜月はやけに自分の視線が低い位置にあることに気がついた。
恐る恐る自分の手をみればその手は小さくまだ幼い子どもの手であることがわかる。

「なっ・・・！」

思わず驚愕の声をあげた菜月だったが、再び彼女の脳裏に青年の言葉がよぎる。

「君の時間を少しだけ戻させてもらうね」

彼の言った言葉の意味をようやく菜月は理解し頭を抱えた。
少し時間を戻された結果、幼児にまで戻ってしまったということだ。
頭を抱える菜月に男性が申し訳なさそうに声をかける。

「目が覚めたばかりのところすまないが、君に会いに来てる人が・・・」
「こんにちは、お姫様」
男性の言葉が終わるのを待たずに女性が男性の前へ歩み出た。
癖が無い美しい黒髪に赤い瞳が印象的なとても美しい女性だ。
「私はイレーネ。この国の巫女です。時間が無いので簡単に説明させていただくわね」
「はい」
菜月が頷き了承の意を確認して、イレーネは言葉を続ける。
「あなたにはこの屋敷で彼、オーバン＝ルグランの娘として生活してもらうわ。この屋敷がある場所は神聖な加護のある山で悪意ある者からあなたを隠し、守る事ができるの」
「はい・・・」
「名前も・・・ナツキ、ではなく別の名前に。言葉には力があって、そのままの名前では色々と危険なのよ」
イレーネが菜月の名を知っている事に驚きつつも、菜月は彼女の言葉をかみしめる。
名前を変えて子供からやり直す。つまりはそういうことだろう。
生きて再び家族に会う。そう心に決めた菜月に迷いは無く、生きるためならば従おうと決め大きく頷いた。

０４：あたらしい名前

イレーネが去った後の屋敷は菜月とオーバンの二人きりとなった。

「それじゃあ帰るわね」

そうイレーネが告げた次の瞬間、彼女は光に包まれ一瞬にしてその姿は消えてしまった。
オーバンに尋ねれば転移魔法で帰ったのだという。
菜月は目の前で未知の現象を目撃し、それを魔法だと告げられ、そして今更ながらに気付く。

「おーばんしゃん。ここってよーろっぱかとおもってたけどちがうの・・・？」
「ヨーロッパ？聞いたことが無い地名だな。ここはイェーガーという国だよ」

くらり、と菜月は眩暈を覚えた。
目が覚めたときに心配をしていたが、子供になっていた事実に驚いてすっかり忘れていた。
何故、すんなりと言葉が通じているのか。
何故、どう見ても日本人には見えないオーバンさんやイレーネという女性が流暢な日本語で話していたのか。
そもそも菜月がこんな目にあう原因となったであろう黒い影とその後自分の身に起きた事実。
そのすべてが現実離れしすぎていた。

間違いなくファンタジーな世界。
そんな世界に自分が放り込まれる事になるとだれが思うだろうか。

ここが外国ならば時間は必要だろうが日本に帰ることはできるだろう。
しかしここは異世界のようで今の菜月は幼い子供。
家族に会うどころか本来いたはずの世界に帰ることができる保障すらない。
考えれば考えるほど菜月は冷たい水の底に沈んでいくように感じた。

「イレーネ様から聞いている君の現状について説明しようと思うんだけれど、いいかな？」
「あっ、おねがいしましゅ」

そんな菜月の思考を遮ったのは、この屋敷の主のオーバンだった。
菜月が答えるとオーバンはにっこりと微笑んで口を開く。

「まず君の事から確認させて欲しいんだけど、本当は十六歳でこの世界とは別の異世界から来たということで間違いないかな？」
「あい、でもどうしてしょれを？」
「イレーネ様から聞いたんだ。彼女はちょっと特別でね。じゃあやはり間違いないんだね・・・それじゃあ僕が聞いている今の君の状況を教えよう」

菜月はオーバンの言葉に頷き姿勢を正す。

「結論だけ言えば、君はこの世界にとって招かれざる客ということなんだ」
「しょれって・・・？」
「本来君がこの世界にくるのはもっと後の予定で、今の君がこの世界に来る予定はなかったらしい」
「あー・・・しりょいひとにききました」
「しりょい人、に心当たりはないが・・・そうか、知っていたか。

では招かれざる客、ということがどういうことかわかるかい？」
「よていがいということでしゅか？」
菜月の言葉にオーバンは首を振り、表情には翳りがさした。
そんなオーバンの様子から菜月はあまりよくない状況なのだろうと察する。
しかし現状把握をしなければ何も始まらないことはわかっていたのでそのまま彼の言葉を待つ。

「それだけじゃないんだ。簡単に説明すると、この世界セーゲンを人として例えるならば君は外から入ってきた病原体だ。免疫が君を排除しようと働くだろう」
「えっと・・・なまえをかえるのやこのしゅがたはなじぇ？」
「この世界に君の免疫をつける為だよ。この世界に関係のあるものの名前をつけることでこの世界に馴染みやすくする。そして子供にする事で君の影響を最小限にすることができる」

（予防接種・・・？）

菜月の脳裏にそんな言葉が浮かぶ。
予防接種は弱毒化した病原体などを抗原として体内に入れて免疫を作る。
つまり今の菜月は弱毒化された病原体のようなものだということだろう。
排除される力を最小限に食い止めるための措置ということか。

「それで名前なんだが・・・レティシアというのはどうだろう？」
「れてぃしゃぁ？」
「僕の妹の名前だったんだ。どうかな？」

（だった、って過去形・・・それってつまり・・・）

すこし寂しそうに微笑むオーバンを見て菜月は胸が痛んだ。
幼い頃父を亡くした菜月は家族を失う痛みを知っていた。父を思うと今でも胸が少し痛む。

菜月はその小さな痛みを振り払い、顔を上げてオーバンに向かってにっこりと微笑む。

「それじゃあとうしゃま、よろしくおねがいしましゅ」
「・・・レティ、よろしくね。あとできればパパって呼んで欲しいな、なんて・・・」
「とうしゃまで」

菜月に即答されオーバンは残念そうな顔をしていたが、先ほどまでの表情の翳りは消えていた。

０５：あたらしい生活

菜月のレティシア＝ルグランとしての生活が始まった。
愛称はレティ。
一週間も経てば、すっかりそう呼ばれることにも慣れてきた。

そんな時にふいにオーバンにかけられた言葉。
レティシアとして生きると決めた菜月だったが、菜月の名前を捨てる必要はないと言われたときは思わず涙がこぼれた。
名前が変わることで元いた世界との繋がりがぷつりと途絶えてしまったような気がしていた。
もう帰ることはできないんじゃないかと弱気にもなっていたのだろう。
それだけのことだったが、彼女は胸につかえていた物がすうっと消えたように感じた。
なにより菜月に戻るためなのだから。

言葉が通じるのは勿論のこと、文字が読めたことも驚いたがありがたかった。
オーバンの話によれば、菜月としてこの世界に来るのは十八歳の時の予定であったらしいと教えてくれた。
そして今は菜月が生活していた時間から１３年も前だということ。
どうやらこの体は三歳ぐらいだということになる。
何者かがレティの体を子供へと戻した為、それに見合うこの時代へとやってきたのではないか、と。
普段であれば信じられないことばかりだが、今の自分の姿をみると納得せざるを得ない。

「全部イレーネ様から教えられたことだけどね」
そう片目を瞑りいたずらっ子のように若い父は笑う。
信託とはそこまで詳しくわかるものなのかと感心したものだ。

この世界がレティシアという存在に慣れれば外の世界に出ることができる。
それがいつになるのかはイレーネにもわからないという。
それまでに外の世界で生きていける力をつけなくてはいけない。

レティとなった菜月ははまずこの世界のことを知ることから始めることにした。
いつか来るその日の為に。

この世界の名はセーゲン。
イェーガーという国の西に位置するミモレットという街の裏にある迷いの森に囲まれた山。そこが今レティたちの暮らしている場所だ。
今でも魔女の住む森として立ち入る人間はほぼ皆無で、たとえ立ち入っても森に迷いの魔法がかかっているとかで山の麓までたどり着くのすら至難の業らしい。
さらに神聖な加護で魔物だけでなく、悪意ある者は立ち入ることはできないのだという。
加護に限度はあれど普通の人間がここにたどり着くことはまずありえない場所だった。
体は小さくなっていたが、知能はそのままであったので比較的早く

一般常識といわれる範囲は覚えることができた。
問題はそれと平行して学んでいた身を守る術だった。

「魔力がない？」
「うん、レティは女の子だしやはり力となると不利だから魔法が扱えれば、と思ったのだけどね」
「うーん、もともと地球には魔法は存在していなかったから・・・かなぁ」

体年齢はどうやら三歳ぐらいらしいということで、便宜上レティは三歳だということになった。
体に慣れてくると少し煩わしかった舌っ足らずであった発音も問題ないものとなり、手足の短さ以外はそう不自由を感じなくなった。
ただ精神年齢が十六歳ということもあって三歳児の口調ではなかったが、オーバン以外の人と話す機会はほぼなかったのでそのまま気にしないことにしたのだった。

「問題は魔力が全く無い、という事だよ」
「無いですか」
「うん、ゼロだね。気持ちいいぐらいない」
「でも元々あたしは魔力なんて持っていなかったですし別におかしくはないのでは？」

そう言うとオーバンは少し困ったような表情になった。

ありえない。
それはセーゲンではありえないことだった。
すべてのものはほんの僅かでも魔力を持つ。
それは人や動物だけでなく木や草、水、土やその辺に転がっている石など鉱物に至るまですべて。

厳密にいえば光や闇、さらには空気までにも含まれている。

『異端』

まさにその言葉がぴったりな存在だとレティは思う。
自分はどこまでもこの世界のものではないのだと。

「まぁ無いものは無いのだからしかたがないとして、あまり気が進まないけど武器の扱いを覚えるべきだろうね」
「武器・・・」
「やっぱり短剣や弓あたりが無難かな。力がなくても技術でかなり補えるだろうし」
「力・・・」
「剣は重いから動きが制限されてしまうだろうし、何より今のレティの体は子供なのだからね。どちらから試してみようか・・・」
「弓がやってみたい、かな」

せっかく魔法のある世界なのだから魔法を覚えたかったというのがレティの本音だがその魔法を使うことはできない。
それならば、短剣と弓でどちらがよりファンタジーっぽいのか。そう考えて出した答えが弓であった。

（せっかくのファンタジーな世界なんだもの。少しぐらい夢があってもいいわよね！）

それに剣などで相手と至近距離で対峙できるとも思えなかった。
弓ならばある程度距離をとることが出来るはずだ。

「うん、良い選択だと思う」

そう言って練習用にとオーバンが差し出した弓は、とても細かな装飾の施されたとても高そうな弓だった。

０６：武器選び

「父様、この弓立派だけれど不良品です」

レティは弦の切れた弓を見つめて言った。

「おかしいなぁ・・・そんなはずはないんだけど」

だって伝説級に近い弓だし、とオーバンは喉まで出かかった言葉を飲み込む。

手入れだってしっかりとしてあり、不良品であるなどということはありえない。

「だって軽く引いただけで切れちゃったんだもの」

「まぁまぁ。それじゃあ実践で弓の弦が切れたときはどう対処すればいいと思う？」

「弦を張り替えるのは無理だし・・・やっぱり鈍器として殴る？」

「それが妥当だろうね」

そう言われ、レティは試しに近くの岩を弓で軽く叩いてみる。

それが本当ならこれぐらいじゃ傷もつかないのかな、などと考えながら。

ぱこんっ

軽い音がして岩が砕け散った。

「父様、この世界の弓は鈍器としての威力のほうが高いんでしょうか」

「ないない。それはないから」

オーバンは気づく。
あの弓は小さなレティにはかなり重く、持ち上げるのがやっとだろうという重さだ。
しかし、レティはその弓を軽々と片手で振って、その感触を確かめているようだった。
そんなに軽々とはオーバンですら振ることはできない。
そしてオーバンの脳裏に、先日尋ねてきた信託の巫女の姿が浮かぶ。

「うちの娘が剣で軽く岩を割れるようになっていたのよ。子供だけに留守を任せるのは心配だったけど、息子も娘もしっかりしているし杞憂そうでよかったわ」

そう嬉しそうにオーバンに話していた。
確かあの人の子供たちは十歳を超えたぐらいだったはずで、息子が優れた魔術の使い手であるのは有名な話だ。
娘は優れた剣の使い手となっているというのも本当のことなのだろう。
しかし相当な熟練の剣士であっても岩を割るのは至難の技。
親がデタラメな力を持っているのだから、子供もまた然り。
そして彼女の保護した娘も・・・もしかしたらその娘以上になるかもしれないな、とオーバンは思う。

色々確認してみれば、レティの身体能力はずば抜けて高かった。
それはすでに人間という枠に収まるようなものでもない。
素早さも然る物ながら、特出しているのはやはり力の強さだった。
そのことに激しく動揺したレティが、

「オンナノコなのに・・・」
とブツブツ言いながら、半泣きになりつつ手刀で家の裏の岩を叩き割っていた。
あまりにもシュールなその光景に、オーバンはどうしたものかと頭を悩ませる。
そんなオーバンの心配をよそに、比較的早くレティは立ち直った。
「とりあえず弓は向いていないようなので他の武器をください」
「それじゃあ直接自分で選んでみる？」
「はい」
身を守るためには武器は必要だ、とレティは言うが、実際手刀で岩を割れるのだからその手が十分武器になる、とはオーバンには言えなかった。

屋敷の奥の一部屋には色々な物があった。
武器や装飾品、絵画や分厚くおそらく魔道書だと思われる本など。
そんな雑多なものが所狭しと部屋に溢れていた。
しかし主であるオーバンの性格からか、しっかりと整理されていてる。

レティは一通り武器を物色する。
気は進まないがレティに合うのはやはり近接武器だろう。
とりあえず手近な短剣を手に取る。
めしゃ。

短剣はそんな音を立てて崩れ落ちた。柄の部分が。

「・・・不良品」

「まぁ武器が無くてもなんとかなるように鍛錬しよう」

「はい・・・」

少し力を入れただけで柄を握りつぶしてしまった娘にオーバンは、そう慰めるしかなかった。

レティの力はやたら強かったが、日常生活に支障は全く無かった。力を込めなければ普通の人と大差なかったのだ。

意識的にでも無意識にでも、ちょっと力を込めた瞬間にほとんどのものは粉砕される。

一般常識などの勉強以外に、常に冷静であるようにと瞑想する時間をとることになったレティであった。

それから穏やかに日々は流れていった。

家の周りの結界から外には出られないが、その理由もわかっているし、その必要性もわかっていたレティは不便を感じつつも不満はなかった。

結界内とはいえ身体を動かすスペースはそれなりにあったし、本当の娘のように愛情を注いでくれる父もいる。

イレーネも忙しいはずだが合間を見つけては様子を見に来てくれ、王都の様子や人気のお菓子などを持ってきてくれたりした。

そしてそれはレティが八歳になった時だった。

「そろそろ本格的に世界に慣らしていきましょうか」

その日は天気もよかったので、訪ねてきたイレーネとオーバンとの三人で外でお茶を楽しんでいた。
その時いつもと変わらない様子のイレーネが唐突にそう告げた。
レティは驚きと喜びを隠せずにイレーネを見つめる。

「もう五年も経ちましたし、少しずつですが結界の外に慣れる訓練をしましょう」
「外に出られるんですか？」
「ええ、その為の訓練ですよ」
「やります！がんばります！」

外に出られる。
それはレティにとっては何よりも魅力的なことだった。
不満はないが、出られるものなら外に出たい。そう思うことは当然だろう。

「こらこら、落ち着きなさい。机にヒビが入ってますよ」
「あっ、やっちゃった・・・」

オーバンにやんわりと窘められ、レティは無意識にた力が入っていたことに気づく。

「少々きついとは思いますが、ゆっくりあせらずにね？オーバン頼みますよ」
「大丈夫ですよ。娘にそんな無理はさせませんから」

くすくすと笑みを漏らしながら答えるオーバンは最初にあった頃とあまり変わらず若々しい。
しかしイレーネは全く変わらず、相変わらず二十台前半じゃないだ

ろうかという容姿のままだ。

（この世界の人はみんなこんなに若々しいのかしら？）

そんなレティの疑問の答えを自分の目で見て知るのもそう遠くない先かもしれない。

次の日から世界に慣れるという訓練が開始された。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4096m/

運命の姫

2011年9月10日12時22分発行